



ショートコメント

★★★★★

Data 2022-98

監督・脚本：ドゥニ・ヴィルヌーヴ

原作：ワジディ・ムアワッド
「灼熱の魂」

出演：ルプナ・アザバル／メリッサ・デゾルモーニ
ブーラン／マキシム・ゴードット／レミ・ジラル

灼熱の魂 デジタル・リマスター版

2010年／カナダ・フランス映画
配給：アルバトロス・フィルム／131分

2022（令和4）年8月16日鑑賞

シネ・リーブル梅田

👁️👁️ みどころ

2月24日に突如始まったロシアによるウクライナ侵攻によって、ウクライナ情勢が連日TV報道されている。しかし、もともと海外ニュースに弱い日本では、その分、アフガニスタンや中東問題への関心が弱くなっている。

民族抗争や宗教対立を含む中東問題は極めて難しい。しかし、『灼熱の魂』と題された本作は、それをバックにしなが、感動の涙を誘う見事な人間ドラマになっている。「母の遺言から始まった、父と兄を探す旅。」とは一体ナニ？

そんな名作が、「午前10時の映画祭」とまではいかないまでも、デジタル・リマスター版で復活。観客数が少ないのが残念だが、こんな名作は10年に1度は鑑賞したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆私が映画評論を書き始め、『シネマルーム1』を出版したのは2002年6月。それから20年の間に50冊にまでなったのはすごいと自負している。今は年間約150本鑑賞で、年間2冊の出版ペースだが、多い時には年間200～250本観ていたし、年間に4冊出版したこともある。その当時は秀作についての執筆意欲も強かったから、必然的に詳しく書いたものが多い。チラシに「ドゥニ・ヴィルヌーヴの存在を世界に知らしめた衝撃作がデジタル・リマスター版で鮮烈に甦る！」と書かれた本作を、私がはじめて観たのは2011年11月8日、場所は、当時頻繁に通っていたGAGA試写室だ。

当時、私はドゥニ・ヴィルヌーヴ監督を知らなかったが、同作には衝撃を受けたから、その評論は詳細で力の込められたものになっている（『シネマ28』62頁）。その後、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督は『DUNE／デューン 砂の惑星』（21年）（『シネマ50』38頁）、『メッセージ』（16年）（『シネマ40』278頁）等では有名になったが、そんな彼の出世作がデジタル・リマスター版で再公開されるとなると、こりゃ必見！「午前10時の映画祭」にラインナップされてもよいほどの秀作を再度観られることに感謝！

◆10年も経てば忘れてることが多い。しかし、本作については、①プールサイドで母親のナルワ・マルワン（ルプナ・アザバル）が突然亡くなる冒頭のシークエンス、そして②公証人のジャン・ルベル（レミー・ジラル）がジャンヌ・マルワン（メリッサ・デズルモー＝プーラン）とシモン・マルワン（マキシム・ゴードット）の2人の双子の姉弟に母親の遺言を呼んで聞かせるシークエンスを観ている間に、「なぜ、こんなにはっきり覚えているのだろう」と思い知らされた。2時間13分の長尺である上、民族抗争や宗教対立をバックにした本作は、本来、日本人には理解が難しい物語。しかし、ストーリー展開の中で、スクリーン上に、①「双子」、②「ナルワ」、③「ダレシュ」、④「デレッサ」、⑤「クファリアット」、⑥「サルワン、ジャーナン」、⑦「ニハド」、⑧「シヤムセディン」という8つの章が示されるので、それが理解の一助になる。もともと、①「双子」はすぐに分かるものの、その他の章は、日本人には、それは地名？それとも人名？となるので、本作はしっかりスクリーンを見続けることが肝要だ。

◆本作公開時のチラシの表は、大写したヒロインの顔をバックに、『灼熱の魂』という“邦題”が大きく表示され、その隣に「お母さん、あなたが生き続けた理由を教えてください」と問題提起されているから、日本人には分かりやすい。ところが、今回のチラシの表は、原題が大きく表示され、その隣に『灼熱の魂 デジタル・リマスター版』と小さく表示、そして、「母の遺言から始まった、父と兄を探す旅。世界が絶賛した、心震わすヒューマン・ミステリー」と書かれている。両者を比較した上で、デザイン上の好みからすれば、私は断然前者を推したい。

また、今回のチラシの裏面には「1+1=」と大書した上、1（それは、かけがえのない愛の物語）、+1（それは恐ろしい物語）、=（時として、知らない方が良いこともある）と、誰にでもわかる“数式”と“謎解き”のようなフレーズを並べている。さらに、逆さまで「何があろうと、あなたを愛し続ける」、「あなたたちの誕生？」との文章を載せているが、こりゃ一体ナニ？これらの意味は本作を真剣に鑑賞した人にはわかるだろうが、はじめての人に理解できるはずはない。そのうえ、「あなたたちの父親の誕生？」という問題提起は、いくら何でも難しすぎる。それを考えると、内容面でもチラシのレベルは前者の方が上！

◆名作は何度鑑賞しても素晴らしい。そのことを私は、本作で再確認したが、本作の評論として書くべきことは前回に書き尽くしている。そのため少し横着かもしれないが、今回は前回の評論をそのまま再度掲載することにしたい。

今回本作を鑑賞して残念だったのは、観客数10数名だったこと。これでは採算は合わないだろう。ウクライナ情勢が注目されているが、中東を舞台とした本作のような名作は、10年ごとに再鑑賞をしたいものだ。 2022（令和4）年8月18日記



Data

監督・脚本：ドゥニ・ヴィルヌーヴ
 原作（戯曲）：ワジディ・ムアウッド

出演：ルブナ・アザバル／メリッサ・デゾルモーニ＝ブーラン／マキシム・ゴードット／レミー・ジラール／アブデル・ガフル・エラーモズ／アレクサンダー・アルトマン／モハメド・マジッド／ナビル・サワラ／バヤ・ベラル

👁️👁️ みどころ

民族抗争や宗教対立。そういうテーマは島国ニッポンと日本人には縁遠いものだが、憎しみの連鎖の中での虐殺や内戦が続く中東ではごく日常？

母親が残した遺言にしたがって、カナダから中東に渡った双子の姉弟がたどっていく中で見えてくる母の真実の姿とは？そして、やっとたどりついた父と兄に宛てた母の手紙にみる許しとは？救いとは？激動の時代を歩んだヒロインの灼熱の魂の叫びを、心を澄ませてしっかりと受け止めたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「あれ」も良かったが、「これ」はもっとすごい！■□■

第83回アカデミー賞の外国語映画賞はデンマークの女性監督・スサンネ・ピアの『未来を生きる君たちへ』（10年）が受賞した。それに敗れたものの、最終的な5本のノミネート作の1本がカナダ代表作品とされた本作。本作はカナダのアカデミー賞たるジニー賞で作品賞、監督賞、主演女優賞など8部門を受賞したというし、『灼熱の魂』という邦題もすごい。さらに、プレスシートによると本作はワジディ・ムアウッドの戯曲を映画にしたもので、そのテーマは中東の「某国」を舞台として展開される、民族や宗派間の抗争、社会と人間の不寛容がもたらす血塗られた歴史を背景に、その理不尽な暴力の渦の中のみ込まれていったヒロインの魂の旅らしい。こりゃ必見！そう思って試写室に行ったが、①「双子」、②「ナワル」、③「ダレシュ」、④「デレッサ」、⑤「クファリアット」、⑥「サルワン、ジャーナン」、⑦「ニハド」、⑧「シャムセディン」という8つの章の中で展開される2時間11分のストーリーは、まさに灼熱の魂。こりゃすごい。

2001年に起きた9・11世界同時多発テロから10年後の今の、「報復と許しを」を

テーマとして描いた『未来を生きる君たちへ』の問題提起もさすがだったが（『シネマールム27』177頁参照）、カナダに住むジャンヌ・マルワン（メリッサ・デズルモー＝プーラン）とシモン・マルワン（マキシム・ゴードット）という双子の姉弟が、カナダで死亡した母親ナワル・マルワン（ルブナ・アザバル）のルーツをたどっていくと、中東の某国で、こんな灼熱の魂の叫びがあったとは！

■ヒロインは私と同じ年代だが、その生きざまは強烈！■

冒頭の章「双子」では、ナワルがプールサイドで原因不明の放心状態に陥り、入院後しばらくして息絶えてしまう姿から始まる。そして、公証人ジャン・ルベル（レミー・ジラル）から、ナワルの奇妙な遺言を聞かされた双子の姉弟ジャンヌとシモンが母親のルーツを訪ねる旅に出発するストーリーが描かれる。いくら公証人が作成した遺言に強い法的効力が認められているとはいえ、死んだはずの父親を捜し出し、その父親に宛てて書かれた手紙を渡せとは一体ナニ！？さらに、兄弟は自分たち双子だけと信じ込んでいたのに、もう1人いたという兄を捜し出し、その兄宛てに書かれた手紙を渡せとは、これまた一体



『灼熱の魂』発売/販売：アルパトロス 税込価格：3,990円
 (c)2010 Incendies inc. (a micro_scope inc. company) - TS
 Productions sarl. All rights reserved.

ナニ！？

長年レベルの秘書として働いていた母親ナワルは世間に背を向けるように生きてきたばかりか、全く子供に心を開かなかったから、特に弟のシモンにとってそんな母親はイカレた存在だった。したがって、シモンにとっては通常の埋葬まで不要と指定した遺言は、母親のイカレぶりを示すだけのものだったから、「せめて葬儀くらい普通の方法で」と提案。ところが、姉のジャンヌはそれをたしなめ、若き日の母親の写真1枚を頼りに、双子が中東にある母親の祖国を訪れる旅に出発する決意を。

そして次の「ナワル」では、中東某国南部の村デルオムでキリスト教系の家庭で生まれたナワルが20代始め頃、異教徒である難民の青年ワハブと恋に落ち、はからずも彼との子を授かる姿と、そのためにワハブが殺され、ナワルも一族の名を汚したとして村から追放される姿が描かれる。出産したばかりの男の子の赤ちゃんを祖母に取り上げられたナワルは、別れ際に「いつか必ず捜しに来るわ。約束する。私の坊や」と誓ったが、こんなストーリー展開をみると、本作のヒロインであるナワルは1949年生まれで私とほぼ同年代であることが明らかになる。私もかなり激動の人生を送ってきたと思っているが、ナワルの生きざまはそんな私の人生とは比べものにならない強烈なものであることが以後のストーリーから明らかに・・・。

■□■宗教対立のすごさは、ここまで！■□■

第3章「ダレシュ」では、1974年に都会に住む叔父宅に身を寄せたナワルが、フランス語を学ぶという本来の目的から逸脱して(?)学生運動に身を投じる姿や封鎖される大学の姿が描かれる。ここらあたりは1960年代後半の私が学生運動をしていた当時の日本と同じだが、中東ではキリスト教徒とイスラム教徒との本格的な内戦まで勃発するから大変だ。そんな中でナワルは封鎖された大学に見切りをつけ、故郷に残した息子を探し出すため南部に向かったが、息子が預けられたはずの孤児院はイスラム系武装勢力の襲撃によって無惨な姿になっており、孤児たちはデレッサという町の難民キャンプに連れていかれたらしい。そこで、ナワルは十字架のネックレスをはずしてイスラム教徒を装ってバスに乗り込みデレッサに向かったが、そのバスはキリスト教系武装勢力によって一斉射撃を受けたうえ、ガソリンをまかれて火を放たれたからさあ大変。かろうじて「私はキリスト教徒よ！」と叫びながら十字架をふりかざしたナワルだけは何とか災難を免れたが、バスに乗っていたイスラム教徒たちはすべてアウト。

日本人にはこんな激しい宗教対立は理解できないが、なるほど、中東におけるキリスト教徒とイスラム教徒の宗教対立はこんなにすごい・・・。

■□■第4章「デレッサ」とは？■□■

第4章の「デレッサ」は地名。ナワルが何とかたどりついたデレッサもあたり一面焼け

野原と化していたため、もはや息子と出会うことはできないと絶望したナワルはここで生きる意味を失い、イスラム系武装勢力のテロリストを志願することに。

ナワルはなぜこのように「急転換」することになったのかの説明が弱いところが本作唯一の難点だが、そこでナワルに与えられた任務は、フランス語がしゃべれることを利用して、ある有力なキリスト教右派の指導者の子供のフランス語の家庭教師として家に入り込み、その指導者を暗殺すること。ある日見事にその任務を達成したナワルだったが、そこで自分も自殺しなかったため、ナワルは南部のクファリアット監獄に送られ、15年間にも渡る拷問を含む過酷な刑罰を受けることに。



『灼熱の魂』発売/販売：アルパトロス 税込価格：3,990円

(c)2010 Incendies inc. (a micro_scope inc. company) - TS Productions sarl. All rights reserved.

■第5章「クファリアット」では？■

ナワルはどんな体罰を受けてもそれに屈せず、いつも歌を歌っていたため「歌う女」と呼ばれていたらしい。第5章「クファリアット」では母の消息を尋ねて、クファリアット監獄の跡地にたどり着いたジャンヌの質問に対して、かつて監獄で働いていたファヒーム（ナビル・サワラ）という老人が答える形でクファリアット監獄内のナワルの姿が描かれるが、そりゃ壮絶なものだ。さらにファヒームの話では、ナワルの精神力のあまりの強さにしびれを切らした看守たちは、冷酷非情な拷問人アブ・タレク（アブデル・ガフル・エラージュ）を送り込んだらしいが、そのアブ・タレクがナワルに対してとった拷問とは？

罪刑法定主義を定める近代的な法治国家では、刑罰はすべて法律で規定されるうえ、看守たちは厳しくその遵守が求められている。しかし中東の某国にあるクファリアット監獄でアブ・タレクがナワルに採用した拷問手法は、連日に渡る執拗なレイプ。愛を伴った結

婚生活、性生活で妊娠しないことがある反面、愛など全くない、拷問としてのレイプでもそれが続くと精子と卵子が結びつくことがあるものだ。日々大きくなっていくお腹をみてナワルは自らその腹を叩き、身体をぶつけて何とか流産にしようとしたが、結局は・・・。

■□■「サルワン」とは？「ジャンーン」とは？■□■

弟のシモンは母親の遺言を「イカレている」と考えていたが、遺言どおりに若き日の母親の写真を頼りにカナダからはじめて中東の地に降り立ち、父捜し、兄捜しの旅に出かけた姉のジャンヌは、ダレシュ大学やデルオムの村で母の足跡をたどり、今クファリアット監獄の跡地にたどり着いていた。そこで看守のファヒームから詳しい話を聞いたジャンヌは、さらに監獄内で母の出産に立ち会ったという元看護婦のマイカから詳しい話を聞くことになったが、この話はあまりにも衝撃的なものだった。他方、ジャンヌからここまでの話を聞かされたシモンも事ここに至っては「我関せず」というわけにはいかず、母親のルーツをたどる旅に途中参加することになったが、元看護婦のマイカから2人が聞いた話はさらに衝撃的なものだった。

第6章の「サルワン、ジャンーン」とは、元看護婦のマイカが、ジャンヌとシモンの姉弟を見ながら、懐かしげな表情で「サルワン、ジャンーン」と叫んだ言葉だが、実はこれは2人の人間の名前。すなわち、あの時拷問人アブ・タレクの子としてナワルが産み落としたのは1人ではなく、サルワンとジャンーンという双子だったのだが、その双子の姉弟とは・・・？そんなバカな！すると、ナワルの遺言にあった死んだはずの父親とは？そして、今明らかになるジャンヌとシモンの父親とは？

■□■「ニハド」とは？「シャムセディン」とは？■□■

第7章の「ニハド」とは、1970年5月にナワルがデルオムの実家で出産し、孤児院に預けられたという男の子の名前で、正式にはニハド・ド・メ。それから約40年後の今、ニハドの消息を知る者は、孤児院を破壊した「シャムセディン」というイスラム武装勢力のリーダーだけだった。

第8章「シャムセディン」では、ホテルから怪しげな男たちに目隠しをされて外に連れ出されたシモンが、シャムセディンから詳しくニハドの消息を聞くことになるが、シャムセディンの訓練の下で優秀な狙撃兵に育ったというニハドは、その後どんな数奇な運命を？

■□■あのプールサイドでは、一体ナニが？■□■

本作は2時間11分の長尺だがその構成は、映画冒頭のプールサイドで亡くなった母ナワルのルーツを、ナワルの遺言に則り、双子の姉弟がたどっていく中で、ナワルの灼熱の魂の叫びを聞くというもの。ストーリー展開の大部分は、ジニー賞の主演女優賞を受賞し

たルブナ・アザバルが若き日の情熱的かつ行動的なナワルを印象深く演じているが、冒頭とラストのプールサイドのシーンでは彼女が老けメイクの水着姿で登場する。娘のジャンヌと共にプール内で泳いでいたナワルがプールサイドにたどり着いた時、目の前に立っていた男の足のかかちに見たある印とは？ナワルは1970年に故郷デルオムで産んだ男の子とはすぐに生き別れになったが、その時ナワルの母親が痛さに泣き叫ぶ赤ん坊の足のかかちにある印を刻んだのは、将来ナワルがいつか坊やを捜しに戻ってきた時発見しやすくするためだが、まさかこんな年になってこんなところで・・・？しかも、ナワルが足にある印が刻まれた男の顔を見ると・・・？まさかそんな・・・。

■□■父宛て、兄宛ての手紙には一体ナニが？■□■

公証人レベルが預かった父宛の手紙と兄宛の手紙はそんなプールサイドでの事件があった後にナワルが書いたものだが、遺言どおりにするためには何としても父親と兄を捜し出すことが不可欠。しかして今、ジャンヌとシモンの父親はあの冷酷非情な拷問人で母親をレイプしまくった男アブ・



『灼熱の魂』 発売/販売：アルバトロス 税込価格：3,990円
(c)2010 Incendies inc. (a micro_scope inc. company) - TS
Productions sarl. All rights reserved.

タレクだと判明した。そしてまた、1970年に母が産んだジャンヌとシモンの兄ニハドにも、今シャムセディンの協力によってたどり着くことができた。そんな父と兄に対してジャンヌとシモンが手渡したナワルの手紙には、一体ナニが書かれていたの？

これほどすごいスケールで灼熱の魂の叫びを描いた映画を私は知らない。本作鑑賞後はあまりの数奇な運命の展開にしばらく呆然とせざるをえなかったほどだ。ナワルにとって、アブ・タレクは憎しみの対象以外の何者でもないはず。しかし、若き日のナワルが実践してきたように、「目には目を、歯には歯を」「報復には報復で」という考えでは憎しみが憎しみを生むだけ。そして、報復の連鎖がくり返されるだけ。それは誰でもわかっていることだが、20代初めからおよそ60歳までこれほどの激動の人生を歩んできたナワルなればこそ、双子の姉弟に対してこんな遺言をそして父宛て、兄宛てにこんな手紙を書くことができたのだろう。最後に明かされるその手紙の文面を見て、涙しない観客はいないはずだ。

2011（平成23）年11月15日記